ライフスタイル

探訪 新ライフスタイル

廃校再利用、コミュニティーの核に

食・アート・学びと地域融合

歴史的建造物などを核にした地域の再開発が注目を浴びている。新旧のコミュニティーが、世代や文化の壁を越えて交ざり合いながら新たな街のアイデンティティーを築いていく。欧米で端を発した開発手法が、日本にもじわり広がり「街づくり」の新たな動力となりつつある。

地域創生の成功例としてあげられるのが米オレゴン州の「マクメナミンズ・ケネディスクール」である。1915年に開校され、80年に閉校した小学校を97年に再生した。旧校舎の講堂は映画館に変わり、中庭が見える職員室はコートヤードレストランに、教室は35室のホテルの客室や結婚式も行われるパーティールーム、そして子供用のプールはジャグジーになった。トイレには運動後に汗を流すシャワーもある。

クリエイティブに廃校を活用した米オレゴン州のケネディスクール

校内の地ビール醸造所から出来たてのビールを味わえる。ボイラーに使われていたパイプ等をポップ・アートで表現したバーではダーツやゲームが楽しめるなど、至るところに遊び心ある仕掛けが施されている。一方で校内には学校の歴史を紹介する写真や卒業生のトロフィーなどの備品がならび、往時の面影を残す。

今やコミュニティーの核として、地域になくてはならない存在となっている。

開発を手がけたのは同州ポートランドのデザイン会社のマクメナミン・ブラザーズだ。古い建物を活かし、魅力あるデザインで再生するコンバージョン手法が得意技で、地域コミュニティーの過去と未来をつなぐ。個性的なホテルや地ビールパブ、ワイナリーなど40カ所以上を運営する。

日本で同様の取り組みに挑んでいるのが淡路島でまちづくり型開発を進める飲食店企画・経営のバルニバービだ。廃校となっていた旧尾崎小学校校舎などを淡路市より購入。「食・アート・学びと地域が融合」をコンセプトにした「サキア」をオープンした。

3月には島の素材を使った大食堂「オサキ食堂 カフェテラス」を中心に、焼きたてパンや自家焙煎コーヒースタンドも開業。ワーケーションでやってきた人たちも活用できるようなコワーキングスペースや、寄贈された本を集めた「こども図書館」も開館した。

佐藤裕久会長は、地方創生ではなく地方創再生と銘打って、「まちが育んできた歴史、伝承、特性を再活用し、見過ごされてきた魅力をよそ者が見出し、活かし、再び住みたいと思えるまちにする」と力を込める。

文部科学省の全国公立学校の「廃校施設等活用状況実態調査」によると、全国には7398の廃校があり、現在も約20%は用途が決まらずに放置されている。自治体にとっては老朽化が進むと共に維持管理費負担も重なり、悩ましい社会課題となっている。地域で長い間愛されてきた学校だからこそ、古いモノを大切にしながら、新しい命を吹き込む開発手法で、多世代で集い、憩い、楽しさを創出できるような新たなコミュニティー空間になることが望ましい。

（商い創造研究所代表　松本大地）